

---

# ノリで神様いじったら異世界で波乱万丈ライフ

くるる

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ノリで神様いじつたら異世界で波乱万丈ライフ

### 【Nコード】

N1511BA

### 【作者名】

くるる

### 【あらすじ】

ある夏の昼、俺はトラックにはねられて死んじまった。……はずなんだけど。自称神様の黒髪幼女が現れて願いを1つかなえてくれるとか言い出した。夢よ、早く、覚めろ。要望通り、夢は覚めた。けど、そこは俺が知っている世界とはだいぶ違っていたんだ。

異世界転生ものです。主人公と精霊とかモンスターとかがいちゃつく(？)コメディー主体のかーい感じのファンタジー、よろしければご覧ください。

感想、お気に入り、評価点をいただけると作者が小躍りします。

## 神様いじり

「あつつい……わけわからない。だれが日本の夏をこれだけ暑くした……」

カゲロウ揺らめく8月夏真っ盛り。太陽が容赦なくアスファルトを焼いていく。その上を俺は左右にふらつきながらに進んでいた。

「頭いてえし……これ熱中症ってやつか？」

頭が唸るように痛い。聞いたことがある。これがテレビの人とかが良く注意してくださいねって笑顔で言っている熱中症ってやつだろう。あんなにこやかに冷房がガンガン聞いているところで言われてもまったく説得力がない。せめて今の俺と同じ境遇に立ったうえで話をしてくれ……って俺は何を言っているんだよ。どうやら熱中症の影響で思考がおかしくなってきたらしい。間違っても素ではないぞ、うん。

「こういう時ってどうすりゃいいんだっけか……水だったか？」

たしかテレビのお姉さんは「水分補給を忘れずに」なんていつていたな。気が付けば喉もカラカラだ。そう思っただけ俺は顔を上げる。髪から滴り落ちる汗が気持ち悪い。黒いアスファルトから跳ね返る熱気に当てられて、今にも倒れてしまいそうだ。

「あ……」

けど俺はそんな中、視界の先にあかい大きな箱を見とめた。この国でよく見る某飲料会社のロゴが入った自動販売機だった。その中

には俺の渴きを潤すべく待っているとしたか思えない炭酸飲料たちが……俺は一步踏み出す。あれってオアシスじゃね？

「あ、あ、あ……」

踏み出すたびに俺の口からなにやら人語とは思えない声上がる。頭は波にのまれる葉のように揺れて、視界ではいまや地面が空になつていた。空が地面に。あれ、今度は空が空だ……やばい、混乱してきた。それでも俺は歩みをやめない。一途に自動販売機という真夏唯一のオアシスを目指す。けどそれはどう考えても過ちだった。そう、決定的に。けどそれに俺の正常でない頭は気が付かなかったんだ。

鳴り響くクラクション。点滅する照明。運転手の驚愕に満ちた表情。俺はどうやら国道の中央に向かって飛び出ししまつていたらしい。

あ、どうやら俺は死ぬ。なんとなくだけどそう思った。いや、確信だな。右隣に自足60キロメートルで迫る何トンあるのかもわからない巨大なトラック。相対する俺、体重64キロ、もやし。どうあがいても俺は死ぬ。回避不可能な決定事項。走馬灯なんて言うのは一切走らなかった。ただただふだんよりも長く感じる時間の流れ。迫るトラックのナンバーを見る余裕すらある。けどそれは相対的な時間。俺もその中では同じくゆっくりとしか動けない。回避不可能。俺はゆっくりと死に近づいて行って……俺は死んだ。

はずだったんだけど……

「おっす。少年」

「だれだよ。お前」

「神様」

「……あつそ」

死んだはずの俺にはまだ意識があった。周りは真っ白だった。雪……じゃないよな。ここは東京。しかも夏の最盛期。容赦のない生き地獄に入り始める季節。それにげんなりしながらうちわを持って俺は今日学校へ向かっていたはずだ。俺はこんな風景を知らない。じゃあきつと夢だろう。そう断定する。なにやら雲の上のようなふわふわしたところに俺は立っている。時折縦に揺れる。少し酔ってしまいうそだ。周りの状況はだいたい把握した。ここは夢の中で、俺の妄想が具現した不思議空間なんだろう。

んで問題はこれだ……この子は誰だろう。小さな女の子。白いワンピースに身を包んでいる。その肌はワンピースの白と比べても遜色ないほどに傷一つない白そのものだった。少し病的にすら見える。しかしそれに反して長い彼女の髪は深い黒に染まっていた。ワンピースの生地を押し上げるような胸のふくらみも、女性的な曲線も見られない彼女、年は……8歳くらいか？

そして問題である。なんでこんな子が俺の夢空間にいる？俺は別段小さい子に興味があるわけではないし、むしろもつとメリハリボディのおねえさんが好きなのだが……おい、夢、チェンジで。

俺が指を彼女に向けて怪しげな仕草をしていることに不信感をもったのか少女は言う。

「神様だぞ？」

しかも電波ちゃんである。俺は夢の中の自分の趣味を本気で疑い始める。けど少し楽しくなってきた。ここは夢の世界のようだし、好き勝手やらせてもらうぜ！

「そうなのか。んで、ここはどこだよ。学校に遅れちゃう」

「神様だよ？」

「そっか。最近はそう言う遊びが流行ってるのか」

俺の時なんて特撮のまねごと位しかしてなかったけどな。最近はエ  
ラク独創的なんだな。

「無礼だね……」

小さな唇をとがらせていう。すこしだけ悲しそうな顔をしているが  
それもなんだかわいらしい。

「お前こそ年上は敬えよ」

はっ……いかんいかん。俺は自分の大人気のなさにそこで気が付い  
た。やってしまった。年長者の余裕を見せてやらねば……。

「あ、わりい。ほら、飴ちゃんあげるからな。何味がいい？」

「イチゴ!!……ではなくてだなっ！」

少女が何か言おうと口を開ける。それにかぶせて俺は言った。

「メロンか？」

「それも好き!じゃなくてだなっ!ワタシは神様だぞ!!」

こいつマジに少女だ。というか幼女。神様な訳がない。というか俺、  
俺の趣味がわからんぞ。マジで。

「そついわれてもな。証拠あるのかよ。証拠」

俺は意地悪く言う。雲の上に立つのも慣れてきたもので、なんだか心地よくなってきた。

腕を組んでふんぞり返る。ドラマでよく見る悪役のポーズだ。

「ない！」

断言かよ……

「じゃあ信じない」

ならば仕方ない。こちらも断言だ。そもそもここが夢空間であることを知っている俺に負けはない……何と張り合ってるんだろ、俺。

「うぬう……仕方ないのお……」

すこししょぼくれた少女は軽く手をかざす。すると白の空間の上にいくつかのカードが浮かぶ。そこには達筆な筆文字で何かが書かれていた。うん？「不老不死」？「最強」？「ハーレム」？「波乱に満ちた人生」？わけわからん。

「ほれ、この中から一つ選んでみよ。かなえてやるぞ！」

そういつてない胸をそらす。えっへん。やめとけ。切ない。それにしても俺の夢、こってるなあ……ここまで鮮烈な夢を見るのは初めてかもしれない。

「「言うは易し、行ふ難し」って知ってるか？幼女」

「幼くないぞ！ワタシはお前より何倍も生きているのだっ！」

「わかったわかった幼老女。んで知ってるか？」

「………幼女にそのようなボキャブラリーはないのだ」

幼女は人差し指の先を合わせてモジモジ。視線を落とす。おい、そこまで沈まないでくれ。俺が悪いみたいじゃないか。悪いけども。

「ま、ようするにいうだけなら簡単だってことだよ」

「なんだおぬし！ワタシがかなえられぬとも思っているのか？」

「うん。そりゃあもう。お前さ、不老不死なんて今まで何人も求め続けて挫折してきた人間の命題みたいなもんだぞ。それを軽々しく言われてもなあ」

「神様に不可能はないのだっ」

そういつてまた胸をそらす。喜怒哀楽の激しい神様だ。もし昔の言い伝えみたいにこいつと天候がリンクしていたらかなり厳しい天候が繰り返されだろう。台風のち全球凍結とかさらにありそうだ。

「わかった。わかった。どれか一つ選べばいいんだろう？」

目の前に浮かぶ4枚の札をみる。いざ眺めてみると一つ以外はとても魅力的だ。

「ふふん。やっと真面目に考え始めたか」

えらそうに上のほうの雲から言う。俺も飛んだらあそこまで行けるのだろうか。

「一応おまえが神様だったら損だろ？」

「ならば先ほどの態度もどうにかならなかったのかの……」

「ほら、神様いじりました、とか友達に言えるじゃないか。軽い小話にでもさ」

友達いないけど。

「であつた時点で小話ではないわいっ！おぬしは恵まれているのだぞっ」

「ま、それはお前が神様だったらだろ」

「だーかーら！」

短い両の腕をぱたぱたとふる。それに合わせてつやのある髪がなびく。しかしふと幼女が動きを止めた。その可愛らしいくるりとして目で俺の事を見ている。

「今度はどうした？」

「ふふん。わかったぞ。おぬしの望みが！まったくいつまでたつても男というのは分かり易い！」

「何の話だよ？」

この子、相当に電波ちゃんだ。俺が知ってるアニメにもこういう子がいて、かわいいなあなんて思っていたが……リアルは少し、きつい。

「しらばっくれても無駄だぞ、少年。どうせハーレムにしてくださいなどと言うつもりだったのだろうっ！」

うん？

ほう。この娘なかなかやりおる。確かに今、俺はそれを選択してみようとは思っていた。

「証拠まであるぞ」

胸をそらす。どうやら癖のようだ。しかも今回はそり方が尋常じゃ

ない。自信と比例でもしてるんじゃないだろうか。

「なぜなら、今！貴様は私のことを嫌らしい視線でみていたからだっ」

「……いや、ごめん。外れ。それは、ない」

即答。ない。悪いが俺にそんな趣味は、ない。あまりにも早い返答に幼女の胸の反りが弱くなる。自信に比例してるんじゃないか、マジで。

「俺がそれを選んでみようと思った理由は言えば消去法だよ」

「しょーきよほう？」

「不死なんてそのうちあきそう。最強なんて今の世界あやふやすぎる概念だ。信用ならん。波乱に満ちた人生。俺は平和に暮らしたい以上」

「お主、夢がないのう……」

「リアリストなだけだ」

「ほう、でもおぬしの顔でハーレムはリアルでないのお」

うるせえ……知ってるわ。

「けど俺がハーレムを成し遂げることより、お前が神様であることのほうがありえないだろ。ほら、大体神様ならもつと豪気にしてみろよ。全部かなえてやるッ、とかさ」

幼女の言うことが俺の心を傷つけた。……知ってたが言われるときついんだぞ。少しだけ仕返しをしてやろうと思ってそんなことを言っただが……

「もういいわ！良いだろう。おぬしの望みすべてかなえてやる。あ

とで私が神様だと知って自らの無礼を恥じるがいいわ!」

そういつて少女はどこかへ消えてしまった。

「えつと……」

俺の周りには4つのカード。彼女がかなえてくれるといった4つの希望。白い空間には俺とこれだけが残された。どうしようかななどと思っていたが俺はここが夢の世界であることを思い出す。そのうちさめるのだ。俺はそれを待つことにした。

いっはぎいでしょう

「ふあああゝよく寝たぜ」

白一色だった世界。俺はしばらくあそこに一人取り残されていた。けど脱出にそんな時間はかからなかった。幼女が消えて話し相手がいなくなって実は不安になっていた俺は、周りのカードの圧迫感と雲のふわふわ感が相まって非常に居心地が悪いな、なんて思って立ち尽くしていたんだが、気がつくと俺の意識は消滅していて、再び意識を取り戻すと、俺は地面に寝転がってどこまでもすんだ青空を仰ぎ見ていたんだ。

「そりゃ夢だよな」

それはそうだ。自分でそう判断したのだ。そもそもあれが夢でないとするなら、俺はトラックにひかれて無残な様で息絶えているだろう。ばたんきゅー。

「このリアルな感覚は間違いなく現実だな。俺の体だ、夢じゃない」

俺は今生きている。それがあれが夢であったことの裏付けになるだろう。さてと、そうなると学校を目指さないといけないな。そろそろ起きるか。今日は天気がいい割に涼しいしな。久しぶりにモチベーションが上がってきた。

そんな俺を応援するように日は暖かく照りつけ、むき出しの地面は柔らかく俺の背中を支えてくれる。時折吹き抜ける風が草原の草木を小さく揺らす……ん、まて、草原？

俺は自らの視界を疑った。何故に草原なんだ？なぜ俺の周りに様々な草木が生い茂った世界が広がっている？俺が住んでいたのは日の

国日本が首都、東京のど真ん中であつてそこは黒い無機質な世界だぞ。剥き出しの地面などなかなかないし、ましてや草原なんてあるわけがない！

「なんじゃこりゃ……」

俺は勢いよく立ち上がる。あたりを見回すとそこは見紛うことなき大平原であつた。見渡す果てまで緑一色。平坦な陸地が地平線まで続いていく。

「なんじゃこりゃああ！」

リピート。勿論言い直したところで現実是不変。夢か？夢がまだ続いてるのか？

「いたっ」

頬をつねる。普通に痛いんだけど……これ、夢じゃないのか？俺は自らのおかれている状況を把握するためにもう一度あたりを見回してみる。

「でけえ山だな……」

振り向いた先には天を貫く大山脈。雲を裂きそびえる山頂は伺い知ることができない。

「立派な川だこと……」

その右側には大河が流れ。

「こつち側は遙かに続く大平原……」

この勇壮な大自然のど真ん中で俺は立ち尽くしていた。美しい、あのままの自然。どこにも人がふれた形跡のない自然のありように俺は素直に感嘆していた。

「すげえ……」

いくらほどそういつて固まっていただろう。しばらくすると一つの疑問が浮かび上がる。

「んで、ここ、どこ？」

一人、風に問いかける。勿論、風が答えるわけもない。だが、しかし、あえて問う。ここはどこだ！

ひゅー。

風が無言で去って行った。

「訳がわかんねえ、どう考えてもあれは夢だっただろうが。なら夢オチで戻るべき世界は俺の家のベッド、すなわち！まだ夢は続いているっ！」

顔を自ら猛打する、俺。……やばい、くそいたい。いろんな意味で、イタい。さっき自分で確認したじゃねえか、ちくしょー。

よし、冷静になれ、ならここはどこなんだ。思考しろ。あれが夢であつた、というのは俺的には譲れない。なぜならそうでないと俺は死んでしまうからだ。簡単な話である。

「ということとは、だ」

可能性は一つ。寝ている俺を何者かが誘拐し、ここまで輸送して解放した、それしかない。しかし、何のためにだ？

「……俺はいつの間にか知ってはいけないことを知ってしまい某国の機関に……ないなあ。その場合は俺、殺されてるよ」

その場にへたり込む。もう一度仰向けに寝転がって、空を眺める。山から生まれた雲が、平原の向こうへ流れていく。実を結ぶことのない思考は、ただただつらいものだった。そんな俺の脳裏に一つの仮定が浮かび上がる。しかし、これは……

「あれが夢じゃなかった……ってことか？」

俺もにわかには信じ難い。謎の自称神様の幼女。彼女がかなえてくれた、いや、かなえるといっていた望みとはなんだったか。

「ハーレム、最強、波乱に満ちた人生……不老不死なんて言うのもあったか……」

もしや、もし、万が一、だ。あの幼女が神様だったとして、あの子の力で俺はよみがえり、不老不死になって復活ポイントみたいなのところから再湧きした……可能性としてはないことはない。もしくはここは死の国である……いまや選択できるのはその二択だ。

「前者なら確かめられるな……」

復活ポイントで再湧きしたかどうかは定かではないが、もし俺が不

老不死になっているのなら……

「一回死んでみるか」

一度死に瀕するほどの一大事、それこそトラックへの衝突とかそういう「確定的な死」に出会い、「死ななかったら」俺は不老不死になっている、つまり幼女は本当に神様で俺は望みをかなえられたということになる。しかし、死ぬ、その行為はまさに「言うは易し、行ふは難し」だ。どう考えても俺は死のうとなんてしない。きっと最後の最後には防衛本能が働いて、「重傷」になって一番つらくなるパターンが見えている。

「なら、殺される、ってのはどうだ」

抵抗しようにもそれ以上の力で迫られてしまえば抵抗は無為に変わり俺は死ぬ。仮定の上ではここは死の国かもしれないのだから、もし死んでしまっても……まあ問題はない。

「けどこの大平原じゃなー」

俺は寝そべったままにつぶやく。俺と似たような身体をした人間みたいな動物はいないし、ましてや俺の言葉が通じるのかどうか怪しい。大体「ころしてください」なんて頼んでも十中八九お断りだろう。

「じゃあ死ねないな」

別に死ぬのが怖いわけじゃないぜ。だってもう一度体験してるし、うん。怖くない。

「どうしようかな」

そういつて寝返りを打つ。草の感覚が肌に心地がいい。一度視界が土の茶色に代わってまた戻ってくるのは青い世界。美し……

「ヴえ……？」

俺の頭上に青い世界は広がっていなかった。そこにあつたのは何かの顎門。俺の顔の大きさぐらいはあるだろうか、犬の顎門のように見えるそれは時折苦しげに上下する。顎門のわきからは大きな牙がむき出しになって生えている。紅い歯茎と相まって非常に攻撃的な色合いをしている。時折吹き出す息は腐った卵のようなにおいがして非常にくさい。

ぼとり……

俺の顔に何やら粘性のある液体がかかってきた。額ほどに当たったそれはゆっくりと俺の唇ほどにまで伝い落ちてくる。すこし酸味のあるそれは俺の鼻孔を小さくくすぐる。

「ええつと……」

俺、その上に犬のものと思われる顎門、そして苦しそうにたらすよだれ。俺が涎をたらすときはどんなときだ？すなわちそれは空腹の時、それも相当に。思考は一瞬……

「お断りしますッ！」

逃げる、一択だ！

俺が飛び上がって駆け出すのにわずかに遅れ、犬と思しき巨大な何かは俺を勢いよく猛追し始める。流石自然の動物、瞬発力が伊達じ

やない。

しかし、俺は全力で逃げる。

喰われるわけにはいかない。俺は死ぬ気など、ましてや殺される気なんていうのもさらさないのだから。

## この力はなんでしょう

「だぁぁっ！ひさしぶりの運動にしては少しきついつて！」

草原を疾駆する。後ろから迫ってくる犬から逃げるために。より前に足を延ばし、より遠くを指すために踏破する。一步でも遠くへ、一瞬でも長く生きるために。俺は全力で地を蹴った。けり続ける。しかし当然、人間の脚力なんて言うのはたかが知れていて、しょせん野性を生きる動物たちに比べるとひ弱なそれではない。一瞬だけ早くスタートを切った俺のアドバンテージと、脚力で大きく俺を上回るアドバンテージを獲得している後ろの犬を比べるならば、軍配は犬のほうに上がるだろう。

どのように襲い掛かってくるのだろうか。前足を大きく突き出して突進してくるのだろうか、それとも首筋を狙ってその巨大な顎門が迫ってくるのだろうか。どちらにしてもその脅威が俺を死に至らしめるまでの時間はそう遠くないはずだった。しかしその時はいつまでたっても訪れない。

「もしかして、俺、今めっちゃはやいんじゃない……」

俺はあたりを走り抜ける風景のスピードに注目してみた。一面が一樣な平原の風景で意識することがなかったが、どこか一点特徴的な地点に焦点を合わせる。それは俺が知りえる速度とは全く違う勢いで吹き飛んで行った。まるで車から見た沿道のように。大地を蹴る足、振り上げる腕、そのどの感覚をとっても今までのそれと大差ない。にもかかわらず、俺の速度だけが異常に加速している。犬が追いついてくる気配もない。俺は恐る恐る振り返って犬の様子をうかがう。やつも俺と同じくらいのスピードで平原をかけていた。口からはだらしなく涎を垂らし、尻尾をぶんぶん振って俺に迫ってい

た。強靱な前足は踏み込むたびに脈打ち、蹴られた大地は小さく凹む。しかしどうやら、俺とやつの最初のアドバンテージをそのままに、チェイスを続けているようだ。

「なんでだ？息もまったく上がらねえし、足もまったくいたくない」

今までの俺はお世辞にも足が速いとは言えない男だった。せいぜいクラスの中で平均ぐらい。そもそもだ、車並みのスピードで地を駆ける人間がこの世にはいたんだろうか。

「いないな、世界のトップでも100メートル9秒だからえつと……めんどくせえ」

計算は途中で放棄した。まあ、要するに時速60キロは人間が出せるスピードじゃないってことだ。じゃあ俺はなんだ？後ろを駆ける犬も大概な速度ではあるが、それはまあ自然の力ってことで一個置こうじゃないか。だとしても俺は都会のもやしだったんだ、このありえないほどに大きな変化はなんだ？

「まさか……最強ってこれのことか？」

まさか、ありえない。自分で言いながらも俺はその可能性を検討し始める。あの幼女が本当に神様だった？

「だとすると一番しっくりくるのは確かではあるんだが……」

希望はかなえられて、俺は一度死んだ。そして別の場所で再誕生した。俺のバカげた仮定がいよいよ現実味を帯びてきてしまった。

「やめだやめだ。まずはこの場を切り抜ける事を考えろ」

俺は深みにはまることを恐れてその思考をいったん切り上げる。まずはこの犬の熱烈なアタックから逃げ切ることだけを思考しろ。脳内の余分な情報はすべて排除だ。生き残れ、ただそれだけのために生きろ。一転して思考がクリアになる。自己暗示といって自らに一種の催眠をかける術、なぜだか俺はそれが得意で、勉強をするときなんかによく活用していた。幼馴染にも別人みたいでキモい、とすら言われるありさまだったから……。さえ切った思考の中、俺は生きるすべを探る。

「距離はこれ以上離せない」

これ以上足のピッチを上げることとはできないようだ。かといって向こうがそれを落す気配もない。

「なら仕留めるか？どうやって？」

俺が格闘を挑んだところで、勝ち目はないだろう。相手は野生の獣だ。もし俺の肉体全体が走ること以外にも最強であるのなら何ら問題は無い。しかしあの娘が総べての望みをかなえたという確証はないのだから、うかつな突貫は危険だ。不老不死、それはかなっていないかもしれない。

「リスクーな賭けすぎる……なにか攻撃手段は……」

そう思って思考の海に沈もうとしたところだった。脳内を貫く雷鳴のような感覚。ただでさえクリアな脳内。その中に一つの言葉が浮かぶ。一瞬で思考がそれにシフトする。それがなんなのかはわからない。しかし口は自然と動き、その旋律を紡いでいた。

「雷剣招来……貫け、サンダーブレード雷撃剣！」

短い旋律。しかし力を持ったそれは世界を揺らした。後ろからすさまじい爆音がとどろく。それに伴って爆風すら吹き付けるほどの衝撃だ。まるで巨大な雷が天から落ちてきたような……

「なんじゃこりゃああああ！」

なんですか、これ！なにやら呪文っぽい何かを紡ぎ終えてすこしだけ振り向いた俺が視たのは犬らしき何かが青い大剣に背中を貫かれて息絶えている様子であった。俺のだいぶ後ろで顔面から地面に突っ込むようにして止まっている。あまりの衝撃に俺の自己暗示トランスもきれちまったわ！

「なんかびりびりしてるし……もしかして魔法ってやつか？」

その大剣は青光りしていて、すこし透明だ。時折剣を挟んで向こうの草原が視えたりする。俺の知りえる素材でこんなものがあつただろうか。いや、ない。そして俺は空を仰ぎ見てこの大剣の発生源を知ることになる。

「あ……すげえ暗雲……ぽっかり穴空いてるし。あそこから来たのか、この剣」

先ほどまでは青空であつた大平原。しかしいまや俺の頭上には大きな雨雲が。時折その中で雷がきらめく。腹に響く音が気持ち悪い。

「それにしても……これ、俺がやったのか？たしかに唱えた呪文はそれっぽかったけど……まさか……ねえ」

俺の知る世界に魔法なんて力は……世界の表側、常識的にはないはずだ。突如として俺がその才能に目覚めて、という可能性も捨てがたいのだが、俺の脳裏で今一つの類推が生まれていた。

「ここ……俺の知ってる世界じゃない？」

それだ。異世界転生。俺がよく読んでいた小説にもあったシチュエーションだ。ひょんなことから一般人が別の世界に転生しちゃってあたふたしながら生きていく……面白い発想だなーなんて思っていたが……

「まさか……ねえ？」

「正解じゃぞ？そのつたない頭でよくわかったのお」

「びつくりした！お前はあの時の幼老女！」

「その呼び方はやめんか……」

いつの間にかあの自称神様が横に現れたやがった！  
相変わらずのワンピース姿で俺の方のあたりに浮いている。なにやらニヤついているのが鼻につく……

「どういうことだよ？ここが異世界ってことか？」

「そうじゃ。ここは貴様が知っている世界ではないのじゃ」

「マジかよ。ったく……なんでこうなった……」

「そううなだれるでない。もともと死んでおった身、救われたことを感謝せい」

「やっぱり死んでたのかよ、俺」

やっと知りえた真実。それはうすうす推測しきっていたことだった。俺は死に、神様の手でよみがえった。ただし、そこは俺の知らない世界。

「トラックにひかれた貴様の果てざまはそれはそれは凄惨であったのう……」

「死んじまってたのか……やっぱり。夢でもなんでもなく、こうわかるとやっぱり切なえな……」

「しかしこうして貴様は二度目の生をえたのじゃ。しかも4つの願いを約束されたうえでのう」

「マジかよっ！あれって本当にお前、かなえてくれたのかよ!？」

「先ほど貴様も体感したであろう。あの脚力はその片鱗じゃ」

「最強……ってやつか？」

「そうじゃ、ほかの望みもしっかりかなえてやった。まあ、うまく使うがいい」

そういつて胸をそらす。あ、この角度は相当に自信満々だ……。

「事情がいまいち飲み込めねえが……わかった。それで、俺はこれからどうすればいいんだ？」

「しらん。自分の人生じゃ、好きなように生きるがよい。手助けはここまでじゃ。もうワタシは帰る。もとよりこの世界の住人ではないからのう」

「おい、まてって！最後に一つ聞かせろ。なんで俺をこの世界に転生させた？」

蒼く発光をはじめ、徐々に透明に変わっていく神様に俺は最後の質問を投げかけた。すでにこうなってしまった以上、文句は言うつもりはない。言っても仕方がないだろう。しかしせめて理由を知っておきたかった。

「理由のう……命を救ったのは気まぐれじゃ」

「……神様らしいな。じゃあ異世界にしたのは？」

「ぶっちゃんミスった」

「ふざけんな!」

そういつて小さく舌を出して神様は消えていった。平原に再び一人きりの俺……マジこれからどうしよう……

## この娘はだれでしょう

よし、状況を整理しよう。ここは異世界。それがあのバカ幼女神のおかげで確定してしまった。そして俺はどうやら一度死んでしまつて、この世界に転生した……らしい。そして幼女がえらそうに言っていた四つの願いが見事成就され、ほぼ完璧人間として俺は今この大平原の中心にいる。

いやあ、素晴らしいね。いや、「夢がない」とあの幼女に言われているように俺はリアリスト。不老不死とか最強とかそういうのに一切興味はなかったよ？けどさ、そうなったんだ、と言われればそれはそれはうれしいんだ。だってそれってすごいステータスだろ？きつとこの世界でもなかなかないはずだ。きつと最強だぜ、俺、いろんな意味で。そうやって浮かれてる俺。けど目下の問題が、そして結構重要な問題が一つ。最強な俺でもきつとどうにもならん問題が一つ。それは……

「結局こつからどうすればいいんだ？」

それである。視界に移るのは大自然、緑と青の世界。確かに美しいし、飽きない風景ではある。けどそこに人の姿は何一つなくて、ましてや人が集まりそうな都市の影すらない。いくら俺が自動車並みの脚力を持っていたとしても、だ。これの踏破には何日かかるかわからない。第一村人に出会うまでの時間が24時間以上かかりますなんて言ったら10人が10人「くそげー乙」というだろう。人生はくそげーってこういう意味か。なるほど。

「じゃなくて……マジどうしろっていうんだよ……」

俺は行き詰って、一度思考をカットする。そして別の興味に目を向けてみた。

それは先ほど空から降ってきた大剣。蒼光を放ち、いまだに帯電しているそれは平原で異様な存在感を放っていた。獣は完全に絶命し、若干火まで通っている気がする。いざという時、食えるのかな、あれ。獣に先ほど俺を追っていたような迫力は、もちろんない。

あの雷剣は俺が行使した魔法……のはずだ。そう思っただけ俺は一步步近づいてみる。獣の濁った眼が俺を見つめているようで少し怖い。

「魔法のイメージだとそろそろ消えてもおかしくないような気がするんだけど……」

俺が知る魔法とは役目を終えたらすぐに消えてしまうイメージがある。これはきつと天から落ちてきて、獣を貫き絶命させた時点でその役目を終えている気がするんだが……もしかしてこの剣、何か意味があるのか？

俺の「現代っ子全開ゲームの展開にあてはめてみよう理論その1、それっぽいものがあつたらとりあえず調べろ」を実行してみよう。

「びりびりしてんなあ……痛くないかな……」

静電気ってあるだろ？あれが俺はすごい嫌いだ。あの不意打ちの卑怯さというか、気持ち悪さというか、とりあえずすごい嫌いだ。そしてこの剣、静電気ばいものをバチバチ、すごい勢いでまき散らしてるんですけど。俺が近づくとたびにその頻度はどんどん多くなっている気がする。最初は透明であった刀身は色づき、今や蒼にかわっている。この静電気の塊に触れたら……イベント臭いな……どうやらあたりらしい。ゲームあてはめ理論、なかなか捨てがたいぞ。俺は決心をして、獣の背に突き刺さったそれに触れた。

「静電気どころじゃねええええ!!」

瞬間、俺の視界が白に染まった。すさまじい閃光。そして爆音。そこに衝撃は生まれなかったが、俺は許容量を超えた感覚に俺の感覚たちは総じてダウン、あらがうこともできずに後ろに向かって倒れていく。

びりびり……。うっ、頭が痛い……。スタングレネードの有用性がよくわかる……。

「ん……?」

スタンし、明滅する視界の中、一人の人影をとらえた気がした。女の子……。?黄色い服をまとった女の子だった。短いふりふりのスカートをはいている。頭から飛び出したツインテールが特徴的だ。なんかアニメに出てくる魔法少女……。みたいな感じ。胸のあたりにはかわいらしいハートのアクセサリをつけていた。背丈は大して高くない、すこし小さめかな?女性的な曲線も胸のふくらみも控えめだ。失せていく意識、そがれていく感覚の中、俺が最後に見たのは

……

「ふう、白……か」

少女のスカートの中身であった。

「はっ！俺は今すごい大切な何かを忘れてしまった気がする！」

意識の覚醒。そこは相変わらずの平原であつた。しかし場所が少し違つのだろつか。俺の周りには草木は映えておらず、少し乾いた地面がむき出しになっている。振り返るとそこにはあの巨大な山並みが連ねている。俺は剣に触れて、静電気のすごい奴（？）をもろに食らつて意識を失つて……

「あ、やつと目を覚ましたね。おはよう」

「ああ、おはよう……ええっ！」

意識の覚醒。やつとこさ目が覚めたよっ！俺の目の前には見慣れない女の子がいた。それは意識を失う直前、うつろの視界でとらえた女の子。俺の目の前で女の子すわりをしながらすこしだけ前のめりになって俺の目を見つめている。

「ど、どうしたのよ！どこか体いたいなの？」

「いや、なんでもない。なんでもないんだけど……」

「なに、どうしたの？」

「えっと君は……誰？」

そう、君は誰だ？俺がこの世界に来てから初めての人との遭遇に若干緊張していた。しかも割とかわいい子だ。というかなんにかわいい。くるつとした眼とその体型はすこし幼い印象を与えるが、その雰囲気を見る限りきつとおれぐらいの年だろう。黄色い女の子、髪まで元氣よく黄色だ。それが健康的な素肌によく映える。

「ええっ！？自分でよんどいてその態度って少し傷つくなあ……」

「え、え、ええっと……」

この世界に来てからわからないことだらけだ。俺が読んだ？この子を？どうやって？

わからないことならまだある。俺は目が覚める時に何か大切な事を忘れてしまった気がするんだが……

「さっきよんだじゃない！まったくあんな強引な文言でよんどいて……もう……」

そういつて顔を赤らめる。左右の人差し指を合わせてモジモジ……。すこしだけ胸のあたりが開いた服装、あまり膨らみはないとはいえ、そこから除く肌はきめ細かい絹のように滑らかだ。短いスカートから除く素足、投げ出されたニーソックスに包まれたふくらはぎ……やばくね？このシチュエーション。……じゃなくて！！

「えっと呼んだって……俺が呼んだのってさっきの大剣くらいなんだけど……」

そうだ。俺が魔法で獣をやつつけるためによんだ大剣。空を貫いて現れたそれくらいしか俺には心あたりが……

「そう！それよ！やっと思ひ出したのねっ！このバカ主<sup>あるじ</sup>！」

そういつて突如として立ち上がり、いまだに呆けている俺をその長い指で俺のことをビシッとさす。それと同時に俺の脳内を一筋の閃光が駆け抜ける。脳内にクリアな思考が戻ってくる。なるほど、そういうことか！

「そうそう、白だ、白！」

そうそう、この女の子のはいていた下着の色、それが俺の記憶から

抜け落ちていたんだ！目の前ですさまじい存在感を放つこれだ！かわいらしいリボンまでついたあれは……ふう……。

「そう、私はあなたの雷の精霊、名前はサン……」

俺が意味不明の単語を連呼しているのを怪訝に思ったのか、「サン」といった少女はその「びしっ」のポーズのままに固まる。ああ、絶景……

「……………」

「ん？それでサンちゃん、どうしたの？」

ほら、俺は紳士だ。そんな内面の醜いものを外に見せたりなんて間違ってもしない。まさか顔がにやけきっているなんてことは……

「あなたって……あなたって人は……」

「ん……んう……？」

あれ？彼女の黄色の瞳に映る俺の姿。特に俺の表情。めっちゃゆるんで……

「もうっ、さいってい！」

「うばあああああ！！」

またしても湧き上がる雷鳴。しかし今度はもれなく衝撃つきだ。空中を吹っ飛びながらまたしても消えていく意識。その中で俺はやつとこの少女の存在を理解したのだった。

## 精霊ってなんでしょう

「すいませんでしたっ！」

「本当に最悪……見損なったわ」

「すいませんでした、すいませんでした！サンちゃんがかわいすぎて、つい……」

「気持ち悪いです。犯罪者みたいよ。「つい、出来心で……」みたいです。キモいです。あとサンちゃんなんて呼ばないでください。」

「じゃあなんて呼べばいいんだ……サンたんとか？」

「もう一度、吹っ飛ぶ……？」

「すいませんでした！！！」

果たして何度目の土下座になるだろうか。俺は地面に額をこすりつけて謝罪の嵐。自称雷の精霊、サンはなんだか猛烈に機嫌が悪かった。

まあ、原因俺なんだけど。

しかし諸君、これは不可抗力である。仕方ないだろう。あれだけの絶景を目の前にしたらどんな男だってああなるさ。詩でも読もうかなと思っただくらいだからな。松島や、ああ松島や、松島や、みたいな感じだ。どうだ、センスあるだろ？

ちなみに土下座しながらも、あの絶景に数度挑んだのだがそのたびに頭を足蹴にされた。まあ、当然か。

「なんかまたバカみたいな顔してますけど、大丈夫ですか？」

「なんだよ、そのジト目は。あと、自慢じゃないが俺は普段からバカっぽい顔をしてるぞ。平常運転だ」

「ホントよね……はあ、一瞬でもかっこいいと思ってしまった自分がにくい……」

「ん、なんか言ったか？」  
「なんでもないですっ！」

なにやらまたモジモジし始めてしまったサン。俺はどうやら非難の嵐をかわしきつたらしい。土にまみれてしまった膝を手で軽く払って立ち上がる。サンもそれをせめるようなことはしなかった。

「んで、サンって結局は雷の精霊ってことでもいいのか？」  
「そうよ。アンタが私を召喚したの。いまはあなたの契約精霊よ。一応の主従関係にあるわ」

唇をとがらせていう彼女。

「召喚……？さっきの魔法じゃなかったのか」  
「さっきのアンタが魔法だと思ってるあれ、あれは私を呼ぶ召喚、そして契約を交わす文言だったの」

「えっ、いつの間に俺はサンと契約を！？」

「人をワンクリック詐欺みたいに言わないで」

「ごめんごめん……。それで魔法と召喚……精霊を呼ぶことはどう違うんだ？」

「まったく新入りはこれだから……わかってないわね」

「仕方ないだろ。俺ってばこの世界の人間じゃないし。いきなりふつと現れた言葉を唱えただけなんだから」

「もう。そうね……。知りたかったら焼きそばパン買ってこい、大至急」

「なんで前の世界のパシリ、っていうか俺のポジションみたいになってるんだよ！」

「……私、あなたのこと大体知っているの。神様から聞いたわ」

「わお。前半の言葉にすごい魅かれる俺がいるっ。けど後半で一気に冷めたわっ。あの幼女そこまでリサーチ済みかい」

俺は学校内でいじめられていたわけじゃない。もちろん金はもらってパシられてたし問題ないぜ。けどまあ……決していい地位にいたとは言えないな。

「幼女って……ほら、一応長い年月を生きる神様よ？一応」

「一応……って悪意を感じるぞ、悪意を。顔も変な感じに笑ってる。ひきつってますよ」

「あは、わかる？そうなのよね……あの幼女、本当にどうしてくれるようかしら……」

なぜかその顔を怒りにゆがめていくサン。かわいらしい面もちが曇っていく。まるでさっきの雷雲みたいだ……

「あ、あの……」

「そうなの。そもそも、あの娘がアンタに「最強」なんていうステータスを与えちゃうから私があんたに呼ばれることになって、あんなに恥ずかし……ああ、もうっ!!」

「ぎゃああ！サンさん！まずいって、なんかびりびりしてるって！ほら、足元、俺また感電しちゃうって！」

「わかったわよ。説明してやるわよ、この世界はね、魔法っていうのがあるのよっ。それはアンタの知ってるような、いわゆる魔法よ！いろんなことができるわ」

「なんでそんな怒りながらなんですかつ。説明はすごいありがたいんだけどちょっと落ち着いて！うわっ、またびりつときた。心臓がきもちわるい……」

「それでそれは精霊の力を分譲して使われるの！わかるっ!？」

「うお、すげえ俺の思考力。「人間は窮地、死の間際にいるときその能力を数倍に引き上げる」ってこういうことだったんだな。わかったぜ……ってびりびりしないで！こっちに来ないで！」

「さっさという！待ってるんだから！」

「なんかメタイ気がするの俺だけかな！？えっとすなわち魔法の源を総べる精霊を味方につけている俺は最強……ってことでいいのか？」

「そう、よくわかったわねっ！」

「照れる……じゃなくて！なんで雷鳴がどんどん大きくなってるの落ち着いて！」

「そうよ、だから私は神様にあんたの所に使わされて……うっ……」

はあ、死ぬかと思ったわ。やつのことでサンは落ち着いたらしく、またその場にへたり込む。あたりの空気は焼け焦げたように臭い。どうやらこの世界には俺の世界にはなかった魔法という力のバロメーターがあつて、その最高位にいるのが精霊なわけか。だから俺とサンは契約を交わした。俺が最強であるために。なるほど。

しかし、こうしてる限りはただのかわいいかわいい女の子なんだけどなあ……さっきみたいにびりびりされるとやっぱり雷の精霊なんだなあとうなずくしかない。それにしてもずいぶんと落ち込んでるな……。

「要するにあの神様が悪いんだな」

「あんたよ」

「責任転幼女」失敗。即答かよ。傷心の少女の心の隙間に付け入るうなど、我ながら最悪だった。

「けどさ、あの神様が俺を転生させなきゃよかった話だろ？」

「あんたが死ななきゃよかったんじゃない」

「そりゃ無理な話だろ。トラックどうやって止めるんだよ」

「……こう、雷でバーンって」

「俺はサンじゃないし俺の世界で雷バーンは誰もできない」

「じゃあ熱中症にならないようにニユースの人の話とかちゃんと聞いてればよかったじゃない」

「まあ……そりゃ……そうだ、な」

「ふっ、完全論破ね」

負けた。完全に敗北。悔し……くないな。しかしサンのほうはなんだか急に上機嫌になる。表情に輝きが返ってきた。やっぱりこのサンのほうがかわいい。さっきの様相（以下雷雲モード）は、その……怖かった。けどもしかして雷の精霊ってことはあっちが素だったりするのか？え、それは嫌だった！

「……あのさ。サンはさ、笑っている時が、すごくかわいいよ」

渾身の笑顔で俺は言う。迫真である。一応彼女と俺は契約精霊、とのことなので命令ではないけどさりげなく方向性を示しておいたら意味があるかもしれない。雷雲モードの発動頻度を減らせるかもというかなり安易な発想だったのだが……

「えっ……も、もう……ばかああああ!!」

「なんでそうなるのっおおおおお!!」

すさまじい落雷。空が陰る。頭上には分厚い暗雲が立ち込めていた。落雷は空を裂き、草原の一角に落下。すさまじい爆音とともに消えてなくなった。しかしなんか落雷直撃ポイント、赤っぽくなってます。火でてますけど、あれ大丈夫？サンさん。

「もうっしらない!」

「いや、火放つとしてその言いぐさはどうかと……」

「あんたのことよ、馬鹿あ!」

「って俺？なんで!？」

「言わせるなんて……卑怯よ……」

……女の子ってわかんねえや。

## 精霊ってなんでしょう(後書き)

詳しい説明は後々小出しで行きます。 釈然としないところもありま  
すがお待ちください。

どこへいきましよう

「サンっ。いいな、これ。すごい……いいっ！」

激しく上下に揺れる俺。ふわっと巻き上がって行ってしまうような感覚は体感したことのない新感覚だ。

「感謝しなさいよっ。私みたいな精霊と……っこんな体験ができる人なんてなかなかいないわよ」

「ああ、すげえ気持ちいい。けど、すこし激しくないか？」

「大丈夫。私はこのくらいが好きなの。あんたは？」

「悪くないね。このまま続けてくれ」

「きやあ！……っと、わかったわ」

「それにしても良い眺めだな」

「そうね」

簡潔に言おう。俺とサンは空を飛んでいた。雷の精霊である彼女が総べる暗雲に乗り、空中を滑っているのだ。かなり高い視点から、まるで鳥になった気分、俺は非常に新鮮な感覚に満足していた。しかし如何せん移動速度が速い。先ほどから風が激しく吹き付けている。時折吹き飛ばされてしまいそうなほどだ。しかしその風すらも爽快だ。視界を白い雲、そして緑の平原、青の大河が吹き飛んでいくさまはまさに圧巻だ。

「さすが雷の精霊、雷雲まで操れるんだな」

「当たり前。けどアンタが……っに乗ってるせいでバランスがとりにくい……のっ！」

気流にあおられながら俺たちは飛ぶ。

俺たちのいる雷雲の上はお世辞にも広くない。俺とサン。二人が座っているだけで精いっぱいだ。むしろ狭いくらい、ましてや雲に掴むところなんて言うのではないので、俺はかじ取り手であるサンの腰に抱きつくことになっている。この姿勢になるまでに長い時間がかかったなあ……最初に俺が前になるって進言したんだ。一応男だしな。

そしたらサンは……「スケベ！変態！ラッキー狙い過ぎよ！」などとのたまって暴れ出し、また失神騒ぎになりそうだったところをどうにかなだめ、この並びにまで変更したのだ。……とはいってもこの姿勢、十分ラッキー狙えるよな……。いかんいかん、そのような発想は感電死を招く。気をつけねば。

「悪いな。これって一人乗りなのか？」

「基本は私専用よ。だから一人乗り……そもそも精霊と人間は本来肩を並べない……って！というかアンタどこ触ってんのよ！」

「どこっておなかだよ！腰につかまってるんだから仕方ないじゃないか」

「なんか手つきがいやらしいの！」

確かに俺の腕は腰を通して回り、おへそのあたりにその指がかかっている。先ほど少し雲に突っ込んだときに揺れたんだ。その時に少し吹き飛ばされそうになってしがみついた覚えがある。たしかに少しくすぐったい位置ではあるだろうが。

「不可抗力だよ！」

「私の魅力に気が付いて……けだもの！」

「そっちじゃないわ！揺れて落ちそうになったからしがみついたんだよっ」

「そうよね……かわいくないわよね……」

「だああっ！そういうことじゃないって、サンは元気な子だし、肌

も綺麗だ。そのぱつちりとした瞳もかわいし、服と髪型もよく似合ってるって」

「えっ……」

「おーい、サンさん、大丈夫」

「つ、つまり！私の運転が荒いって言いたいのね。けどこっちから言わせればあんたが乗ってるからこうなってるのよ。そうよ、文句があるならおちなさい。そしたらもっときれいに運転してあげる！」

「元も子もねえじゃねえかつ！」

また大きく雷雲が揺れる。上空の気流はどうやら乱れていて、先ほどから揺れが収まらない。俺はなおさらにその体をサンにくっつけて耐える。布越しに伝わる彼女の体温が俺を安心させてくれる。首筋はしなやか、俺の顔は今彼女のうなじくらいの位置にあるんだが、女の子のにおいがして非常に心地がいい。そうしていると彼女が急に悶え始める。どうした？

「そんなところで…… 大声をださないつ。くすぐ…… ったい！」

「うおっ！また揺れた、気を付けてくれよ！」

「だ…… から。そ、そんなところで息をはかない…… でっ」

「俺に死ねと!？」

「そっじゃないわよ！」

「あ、雲が晴れた……」

雲の中を突っ切っていた俺たちの視界が一転して開ける。青空、平原。そして俺の目の前にあらわれたのは世界史とかで見るような、昔の西洋の都市であった。主な建築材料は煉瓦、風車が回っている場所、蒸気が上がっている場所が点在し、人々の活気が感じられる都市だった。ここが俺たちが目指していた都市、「リエア」だ。

「はあ……死ぬかと思った……」

「こっちのセリフよ……ああ、疲れた……」

俺たちはリエアの正門前にやってきていた。多くの人が行きかうこの都市、平原へ向かう冒険家の最後の支度をする都市でもあるらしく、商いも盛んで、門の外にはたくさんの人がいた。俺はこの世界に来てから見る初めての人込みに少し感動した。

「さてと、じゃあここで情報収集でもするか。サンはどうする？あくまで俺の勝手なことだから、どっかふらついてきてもいいけど」「いいわよ、別に。あんたとは一応契約してるわけだし、隣にいるわ。一応この都市の案内もしてあげる」

「ああ、助かるよ、サン」

俺がこの都市に来たのは情報収集のためだ。なんでもサンに聞いたところこの都市が最寄、かつ活発な都市だということで異世界デビュー直後の俺はこの都市に来ることにしたのだ。そのために雷雲を飛ばしてもらったわけだ。俺の脚だと10日かかる距離をたかが数時間で走り抜ける雷雲、さすが精霊の力だ。

「最初はどこに行ってみようかな」

「ほら、私がいないと大変でしょ？そうね、疲れたのなら宿屋、あなたに武器や防具の充実は必要ないからそういう手のお店はいいとして……」

「あ、そうだ。この都市にギルドってあるのか？」

ギルドとはゲームなんかでよく出て来る戦士たちのコミュニティー

だつたはずだ。時に町人からの依頼をこなし、時に戦争に向き…  
…時には自らの地位のために国と戦ったりもする、そんなイメージだ。あとゲームの序盤とかでギルドへ行くと割と親切に世界の説明をしてくれたりするし…ひとまず多くの戦士がいることは間違いない。情報収集にはうってつけだろう。

「あるにはあるわよ……けど……」

「よっしゃ、まずはそこいつてみよう!」

「はあ……まったく話を聞かないのね……どうなっても知らないわよ」

「ん?」

サンの態度が少し気にはなつたが、俺は自らの世界にいなかった「戦士」という存在にすこし心を躍らせていた。めざすはギルド、さあ、いってみよー。

## この娘はだれでしょう 2

「えっと……ここが、ギルド？」

「そう、ギルド。ただしこの都市でギルドっていったらこんな感じよ」

目の前にあったのは酒場だった。西部劇でよく見るあの両開きの扉の向こうでは屈強な男たちがその得物であろう大剣を背負ったままに大きなグラスをあおっている。みんながみんなすごい傷を負っていて、誰一人として俺みたいなもやしはいない。俺が思っていたような受付嬢もいないし、ましてや「優しそうな」人なんて誰一人としていない。

あ、誰かが殴られてぶっ飛んで行った。

「ギルドってあれじゃないのか？受付とかがあってそこに依頼をすると誰かが解決してくれたり、逆に解決するとお金がもらえたりするあれじゃないのか？」

「そうね。基本的な都市ではその通りよ。けどここは平原に一番近い都市。すこし事情が違うの」

「詳しく」

「えらそうに……。ここは平原に一番近い。さっきアンタが会ったような獣、モンスターの生息地に一番近いの」

「なるほどな。さっき空を飛んでる時に何匹も目にはいったよ。でかいカメとか……. どんだけでかいんだよ、あれ」

空を飛びながら俺は平原を眺めていたのだがその時にたくさんの見慣れない生物を目視した。その中でも俺の視界をその甲羅だけで埋めたあのカメ、それが俺の脳内をその図体が如く占有していた。馬鹿みたいにかかったぞ。その甲羅の上に数匹のモンスターが巣を

つくつていたし、破格の大きさだった。

「あれは「スッポソ」。一部の美食マニアの中ではコラーゲンが豊富な食材として珍重されてるらしいわよ。私は食べたことがないけど」

「ええっ！あれ食べるの？というかどうかやってどうやって捕まえるんだよ、あれ」

「それよ。それをするのがこの都市のギルドメンバー。この町のギルドは本来の人助け組織ではなくて、ハンターの協力機構よ。ハンターたちが集まって互いに協力してモンスターを狩るの。もともとこの都市は狩りのための中継都市だったんだけど、そのハンターたちが生み出す富で繁栄したのね。狩りで手に入れたモンスターの一部を商人や職人にうるのよ。さっき言った「スッポソ」なんて金持ちに法外な値段で売れるのよ、「珍味」とか言ってるね」

「なるほど……確かにこの立地、狩りには最適だよな」

「そういうこと。この都市の人間はそのほとんどが狩人よ。だからこの町でいわゆる「お悩み」なんていうのはほとんど生まれないの。生まれたとしても「スッポソ討伐メンバー募集」とかだからここでいう「ギルド」っていうのは「狩人協会ハンターズギルドって言われているの。一人では狩れない大きな獲物を協力して狩って、利益を分けるための機関よ」

「なるほどね……狩人のためのお悩み相談所か。だからこんな荒くれものばっかりなわけか」

「そうね」

目の前の酒場が狩人のたまり場、すなわち狩人協会なわけか。物騒だな……こわいなあ……。どうしよう、すごい、かえりたい。そう思って扉の前で縮こまる俺。よし、かえろう。だって怖いもん。そう決心をした時だった。

「ご、ごめんなさい！」

「ん？ぐばあああああつ！」

女の子が突っ込んできた！

というかぶっ飛んできた。俺の腹あたりに思い切りよくタツクルするようなジャストフィット。そのままに後ろへ吹き飛ばされる俺、俺にまたがるように倒れこむ女の子。

背中から減速することなく突っ込んだ俺は肺の中の空気をすべて強制的に吐き出すことになって、一瞬気が遠くなった。視界の眼滅、最近はその雷で慣れてしまった感覚だ。慣れって怖い。

「あ、大丈夫ですかっ！？」

「げほっ、あ、ああ……大丈夫だよ。それよりも君、怪れない？」

「あ、はい……大丈夫です……」

「そう。じゃあ、立とうか」

「えっと……腰が抜けちゃいまして……すこしそれは、難しいかなあ、なんて」

俺の上で肩を震わせていう彼女。黒髪ショートカットの女の子だった。職人さんなのか、少し汚れてしまっている青い職人服を着ている。ポケットがたくさんついていて利便性優先の男っぽさすら感じさせる服装。けれど胸のあたりを押し上げるふくらみはこれでもかというほどに女性性を強調させていた。小さい体つきに似合わないそれは、なおさらに存在感があった。

「おい、姉ちゃん！いい加減にしろや。納品の規定は今日だろうがよ」

俺には見えないが彼女の背中の方こう、そこから野太い男の声が聞こえてきた。おそらく狩人のそれだろう。その声に少女は大きく肩

を震わせる。

「うつ……すいません、すいません……今日の内に仕  
上げますから……」

「素材も仕入れてないらしいじゃねえか、どうすんだよ、ああ!？」  
「はつうう……」

どうやらこの少女、思った通り職人さんのようだ。しかし依頼の納  
期に間に合わず、責められているらしい。まあ、身から出たさび、  
責められることは仕方がない。だがしかし、お前ら、それがかわい  
い女の子に言うセリフか？

「おい、お前ら、よってたかって女の子いじめやがって。すこしく  
らい気をきかせるよ。それでも男か。男だったらかわいい女の子を  
抱き留めてやるくらいの余裕を見せてやれよ」

どうだ。かつこいいだろ！

「アンタさ、とりあえず立つたら？間抜けよ、本当に」  
「……確かに、めっちゃ恥ずかしい」

地面で女の子に馬乗りになれながら喧嘩を売る男、新感覚だ。俺  
は腹の上で泣き出しそうになっている女の子に立つように促すのだ  
がぐずってしまっているので話を聞いてくれない。仕方ないな……

「ちょっと失礼しますよ」

「きゃっ、あ、あの……」

「でた、セクハラ」

「ちげーよ。これくらいは許せ。ごめんな」

俺は少女のわきに手を入れて軽く持ち上げる。小柄な彼女はすつと持ち上がる。すこしだけそのふくらみに触れてしまった気もするが感覚から排除しろ。排除しないと俺の脳内がその素敵感覚で埋まってしまう。

まだ腰がきつちりとたたないようなので、俺は少し体を貸してやることにする。はあ、やっと立てた。

「じゃあ言い直して……」

「うるせえよ、坊主。お前に用はねえんだ。後ろの姉ちゃんをだせよ」

「見え切りに失敗するここまで悲しいのか……」

「かつこわるかったわよ、最高」

「おい、サン、笑いすぎだよ」

いつの間にか彼女は俺の背中に寄り掛かるようにして、たっていた服の裾をつかんで俺にぴったりとくっついていいることもあってその豊満なふくらみが俺の背中に触れ……

「はう……ありがとうございます」

「にやけてるわよ」

「そんなわけない!」

そんな感覚の海に沈もうとしていたところにサンの雷が落ちかけた。なぜだか表情を雷雲モードに近いものに変えている。

「やっぱり男って単純ね。胸が大きい女の子に迫られちゃうとどうやってもうなずいちゃうのね」

「そんなことはないぜ、俺はこの女の子があまりにも怖い男の人から追われているから助けてやろうと思ったわけ……」

ちなむとこれは本心だ。

「本当に？心の中では「ああ、この子かわいいな。助けたら何かお礼をしてもらえるんじゃないだろうか？」とか思ってたでしょ」

「思っただけだもの！サンは俺をなんだと思ってるんだよ！」

「……けどもの」

「その認識をまず是正しろ！俺がサンに何かしたか？」

「……見た」

「ん？」

「もしあの事件を私の口から言わせる気があるんだとしたら私は一生あんたを軽蔑するわ」

「ああ、俺もさすがにこれはないなって思った」

さすがにあれをサンの口から言わせるなんて言うのは変態度が高すぎる。俺は紳士だから間違ってもそんなことはしないぜ。

「でもかわいい女の子が窮地ならみんなに手を貸してあげるんですよ？」

「それはもちろん。困っている人がいたら助ける、人として基本だろ？」

「じゃあ、もしあの狩人、目の前で厳つい声を上げていた狩人だったら？」

「無理。ガチムチは好みじゃない」

「おい！すごい失礼なことってねえか、おめえ！！刻むぞ！」

うおっ！ノリでしゃべってたら狩人さんから脅しにも似た突込みが！めっちゃこわい……

「じゃあその女の子だったら？」

「サン、狩人さんの脅しは無視ですか……。もちろん助けるよ。そ

れでこういうことになっているわけだし」

「じゃ、じゃあ……わ、私は……？」

「助けない」

「よし、殺すわ」

「なんでっ！サンは強いし、むしろ俺が助けられてるからっていう

……」

「おい、いい加減「夫婦漫才」やめろや！」

「「誰が夫婦だ！！」」

こんな殺伐とした家庭、俺はいやだぜ？まあ……相手がサンなら……  
…あ、りかな。

「それで姉ちゃん、どうすんだよ。納品予定の品は、用意できるのか？」

「素材さえあれば……できます」

「その素材を盗まれた、なんて都合の言い訳過ぎるぞ。ましてや一日仕事で仕上げようとしてたなんて、職人としては失格だろうが」  
「ご、ごめんなさい！」

目の前の大柄な男たちは追及の勢いを増していく。少女はどんどんと委縮して小さくなっいき、その眼尻には涙がにじんでいる。

「おいおい、まてよ。盗まれた、それは不可抗力じゃないのか？」

「ああん？その服装、ここの人間じゃないようだな。一応教えといてやるが、この町で盗人がきたから仕方ないなんて言い訳は通らない。ちゃんと管理しておけばいいんだからな」

たしかにそれは違いないな。そこらへんは俺たちの世界と同じだよな。失礼した。

「そうなんです……ごめんなさい……」

「おいおい。そんな謝るなって。謝る必要なんてないぜ」

そうだ。だとしても、だ。こうやって高圧的に責めていったってなにも好転しない。それも俺の世界と同じだろ？ だったら……

「え……」

「その素材、俺が今日の内に集めてきてやるよ。任せろ」

「ったく……アンタねえ……」

視界の隅ではサンが頭に手を当てていた。悪いな、すこし手伝ってもらうことになるかも。そして隣の少女は大きく目を見開き俺を見ている。

「あ、ありがとうございます！」

「お前らもそれで文句言うなよ。この子は確実に納期までに品物をおさめる。いらねえことは言うんじゃねえ」

「ほう。いいだろう……楽しみに待ってるぜ、坊主！」

そういつて狩人たちは笑って去っていた。取り残されたのは俺と二人の美少女。

「それで、少女、依頼のものってなんなんだ？」

「「スッポソ」の尻尾です」

「マジかよ……！」

いきなり俺の行く末に暗雲が立ち込めた。そのころ俺の契約精霊である雷雲さんは……

「あ、あれ。さっきの人、夫婦……め、夫婦……って言って……」

なんだか一人でぶつぶつぶやいていらっしやった。

この娘はだれでしょう 2（後書き）

新キャラ登場です。次回以降大活躍（予定）です。どうぞよろしく  
お願いします。

何を言っているんでしょう……俺

「あ、あの私セイミっていいいます……。さっきはありがとうございます」

「いや、大丈夫だよ。気にしないで。君も災難だったね」

「あ、はい……」

「盗まれちゃったんだっけ？素材、しかも「スッポソ」なんて貴重な素材」

「そうなんです……。朝起きたら、なくなっていて……」

「あ、泣かした。いけないんだー」

俺とセイミちゃんは依頼について話していた。そんな中、サンちゃんがへそ曲がり中です。なんだか俺がセイミちゃん……。さっき俺が助けた少女と話すために場所を移そうとしたときだ。狩人たちが消えたことに安心したのか、セイミちゃんは再びへたり込んでしまったのだ。まあ仕方あるまい。あれほど屈強な男たちに追っかけられていたのだから。俺だったら確実にちびってる。

それでその場所での依頼について立ち話をするわけにもいかないし、しゃれた酒場へ場所を移したのだ。その時に彼女をおんぶした。それがなんだか知らんがサンの琴線に触れてしまった。「私……私もまだ……」とか言っていたが。なんだろう、雷雲の運転に疲れていたから自分もおぶってほしかったのだろうか。それ以来ずっと俺の隣でびりびりしているのだ。時折、飛んでくる静電気がマジで痛い。

「いいんです……。私が悪かったんです……」

「どうしたの？一応ちゃんと管理してたんでしょ？」

「そ、それが……」

「ん？」

「商人の方と買い付けの約束をして……。大きいものでしたから、

それを移動させるための台車をとりに家にまで戻ったんです」  
「なるほど、それで？」

犯人はその時点で仕込みをしていた、ということであろうか。たしかに高値が付くという素材だ、そのぐらいの下準備は平気でしてやるだろう。

「それで……」

「うん、それで」

「そのまま取りに行くのを忘れてしまったんです……。設計をしていた徹夜明けで、こう、すうつと寝てしまいました……」

「はあ……それって自業じ、いたっ！サン、ナイス！」

俺が危うく口を滑らしてしまったところに静電気が飛んできた。俺が座っているソファの背もたれに腰を掛けたサンの仕業だ。しかし今回はこの痛みに救われたな。確かにこのセイミという少女、うっすらと眼の下にクマができています。

「ど、どうしたんですか？」

「い、いやなんでもないよ……って痛い！サン、これってフォローでもなんでもなくてただのいじめだね！？」

「そんなことないわ、愛よ」

「愛が重い！あと愛って言葉はサンには似合わない、あばばばしびれー」

「こっちの気も知らないで……」

「そ、それで、セイミちゃん。後からとりに行くことは？」

「しました……けどもう売り切れてしまったらしくて手に入れられることもできず……」

「それっていつのこと？」

「おとといです」

うーん……この子、職人さん向いてないんじゃないだろうか。今日が納期だ。おととい購入、昨日で仕上げる。トラブルの計算とかはしなかったのだろうか。あとこの子の朝起きたらなくなってたってこういう意味かよ……。どこか「ぬけてる」みたいだし、大丈夫かなあ……。

「いまさら再受注しても間に合わないよなあ……」

「そんなんです、「スッポソ」の生息地域に行くまでに半日はかかりますし、狩るとなればもっと長い時間がかかりますから……。無理なんですよ、私。昔からドジばかりで、まったく成功しませんし……。久しぶりに入った仕事に舞い上がっていたんです……。けど、どうせこれからも失敗続きで……」

「失敗続き」、かちん。俺の中で何かが外れた。

「おい、やめろよ」

「えっ」

「ドジばかり、それはそうかもしれない。俺がこうしただけ接しただけでそれは感じてたことだよ。けど「これからも失敗」なんて自らの可能性を自らで閉じる、そんなバカみたいなことはやめてくれ」

俺はその考えかたが大嫌いだ。お前は楽観的なただ、そういわれるかもしれない。だとしても、俺はその言葉が嫌いだ。理由なんて明確なものはない。ただただ許せないそんなエゴ、それを少女に押し付けている俺も体外だ……。俺は内心自らを恥じる。しかしどうにもこの言葉だけには、反応してしまう節があるのだ。

「で、でも……」

「でもないじゃない。謝ってほしいわけでも、ムリに肯定してほしいわけでもないさ。けど一つだけ言える、さっきみたいな自らの可能性の否定はとっても悲しいことだ。だってその眼のうつすらとした「くま」、手の「ペンだこ」それだってその依頼のために、これからの君の仕事のため……可能性のために積み上げた君の努力の証だ」

「あ……」

彼女はさつと手のひらを閉じる。それでも指の付け根にはうつすらとあかい跡が残っている。おんぶした時にも少しだけ感じたそれ、何を恥じることがある。

「そんな君の大切な体の一部すら、その一言は否定するんだ。そんな軽々しく言うもんじゃない。なに、大丈夫だよ、セイミの可能性は俺が繋いでやる。ぱぱと手に入れて帰ってくるから、まってるって」

「け、けど……」

「片道半日以上かかるって？大丈夫、そこはこのお姉ちゃんがどうにかしてくれる」

「仕方ないわね……まったく。いいわ、契約者として。ただし、高くつくわね」

「請求は俺で頼むぜ、サン。よし、行こう。さつさと帰ってこないとセイミの作業時間が足りないからな」

「わかったわよ、正門の外、さつさときなさい」

「了解」

そういつて俺とサンは席を立つ。しかしサンはすでにそこにはいない。雷鳴のごときスピードで先に行ってしまった。

「あ、あの……ありがとうございます……」

「ああ……いきなりだが臭いと言っちゃって悪いな。けど俺的に

「そこは譲れないところだったんだ」

「い、いえ……ありがとうございます。あ、あの、その……かつこよかったです」

「そうか？ただのエゴだよ、押し付けて悪かったな。それじゃ、また今度」

「あ、はい。まっていますね」

そういつてセイミは笑った。目の下のクマも気にならないほどの、満面の笑みであった。

「わるい、待たせた」

「おそいわよ、またナンパしてたの？」

「ちがうってえの。来るときそういえば一匹、「スッポソ」みたよな？」

「うん、けど相当に大物だったわよ？」

「探してる暇もないだろ。一步の移動距離はかなりでかいみたいだったけど移動速度自体をかなりのろまだったはずだ。雷雲で飛ばしてくれ、全速力だ」

「まったく、急にスイッチ入っちゃって。相当にお人よしね、あんた」

「ああ、うざいくらいね」

「まあ、それもいいんだけど……」

小さな声でいうサン。うれしいじゃないか。

「ありがとう、サン」

「ええっ！聞こえてたの！？」

「ばっちし、いやあ、うれしいねえ」

「……ほんと、都合のいい耳、もってるわね」

そういつてサンは笑う。てっきり雷雲でも出てくるかと思ってたが、なんだか少し機嫌がよくなってるみたいだ。すると空が陰り始める。乗ってきたときのような雷雲が現れたのだ。

「よし、いこうぜ、サン」

「わかったわよ。あ、あの……一つ、いいかしら」

「いいよ、なに？」

「今度は場所……逆にしない？」

俺たちが目指すのは巨大大カメ、「スッポソ」その尻尾だ。俺は都市に分かれを告げ、再び平原へと挑む。

何を言っているんでしょう……俺（後書き）

主人公、ちょっとづい言い分かもしれないね……申し訳ございません。

すこし真面目な雰囲気になってしまった回ですが、どうぞご容赦を……。今回は「スッポソ」の討伐へ向かいます。二人はどうやってあの巨体を狩るつもりなのだろうか……。次回、「どうやって狩りましょう」「どうぞよろしくお願いします」。

どうやって狩りましょう

「それにしても……でかいな……」

「でかいわね……」

どしんどしん。目の前、違うな。はるか先に「スッポソ」はいるのだ。しかしあまりの大きさに目の前にやつがいるように錯覚してしまふ。それほどにでかい。一歩踏みしめるたびに地面は揺れ、ずつと離れたところの鳥が飛び立つ。俺も太鼓を聞いているときのような、腹の底を揺さぶられる感覚にとらわれていた。

「ああ言い切ってきたはいいけど、これどうやって倒せばいいんだ？」

セイミちゃんには「取ってくるぜ」なんていいきってきたが問題は山積んでいる。まずこいつの動きを止めなきゃならない。そして巨大な尻尾の切除、それは本来かなりの大人数で成し遂げることなのだ、とサンは雲の上で教えてくれた。

「そうね。セオリーだと金属の糸で雁字搦めにする。それで動きを止めた後に、尻尾を切断する。まあどうしてもそこには多数の人間の助けがいるわ」

「そうだな。ギルドで頼めばよかったか」

「無理ね、よそ者に強力なんかしてくれないし、そもそも彼らにとつて平原に出ることは結構な一大事よ？」

「あ、俺たちみたいに雷雲使えるわけでもないしな」

俺たちはサンが駆る雷雲のスピードがある。しかし彼らにしてみれば何日もかけて踏破する大平原だ。

「そう、狩人は死に至るかもしれない危険な仕事、案外と慎重な  
よ、あいつらも。準備も必要、軽く遊びに行くみたいな感覚では出  
てこれないの」

「なるほどな……。じゃあ俺たちだけでやっぱりやると。えっと、  
攻撃手段っていうと……。サンの魔法だとどんな感じだ？一応最強  
なんだろう？魔法の威力的には」

「そうね、雷の魔法について言えば私の扱える魔法は最強規模よ。  
けど……。時間はかかってしまう。一日はかかっちゃう。相性があま  
り良くないの、あの「スッポソ」とは」

「あいつ、雷に強いのか。じゃあだめだな……。」「  
雷に強い、というよりも魔法に強い、あいつは。残念ながら、  
私、精霊ひとりだけじゃあいつはすぐには倒せない」

精霊ひとりでは倒せない。サンはそういった。なら……。

「さて……。そうすると……。もう一回、なんか召喚するか」

それだ。あの獣を倒した時、すなわちサンの召喚の際に生まれたあ  
の雷剣、あれはすさまじい破壊力を伴って現れた。ならあれをもう  
一度繰り出して、なお精霊さんに協力してもらえば……。そう思っ  
ていたのだがそれを遮るようにサンが大きな声で言った。

「だめ！それはだめ！ほかの精霊を呼ぶことだけはだめ！」

「なんでさ！？」

顔を赤らめて、恒例の落雷付きで怒鳴る彼女。ああ、またおなか痛  
くなってきた……

「だって……。精霊と契約するってことは……」

「ことは……？」

「ああつ、もう！いいの、今はそんなこと！あと、あとよつ」

「けどそうでもないと間にあわないだろ？ サン以外の精霊さんにも協力してもらってみんなで攻撃すれば……」

「だめっ！だめだめだめ、ぜっ！たいダメ！そもそも精霊って魔法攻撃をするような奴が大半なの、よんでも無意味よ」

なにやらサンが緊迫した表情でそういうので、俺はその案を切り上げることにした。ここまで必死なサンも珍しい。なら、どうする。魔法による攻撃は非効率、サンはそういつている。サンは精霊で、基本的な攻撃手段は魔法だ。そして俺。まだ自らも理解していないが一応、体のポテンシャルは格段に上昇をしているようだ。しかしそうはいつても、あのカメを昏倒させるほどの一撃を生み出せるかと問われれば、それは「否」、だ。

「魔法攻撃は非効率、俺の攻撃も大して有効とは思えない。有効な物理的な一撃は望めない……」

「ど、どうしたの、あんた」

俺はいつの間にか自己暗示<sup>トランス</sup>状態にあったようだ。確かに思考は澄み渡り、あの獣と渡り合った時のような冷静さがある。ここまで質が高い集中状態、これも最強の片鱗なのだろうか。そんな俺の様子にサンが小さくいぶかしむ。しかしそれに構うこともせずに俺は思考を続行する。物理的な一撃、それを俺は求めなければならない。

「なら、物理的決定打をうめる存在が必要だ。なら解答は一つしかない。精霊を呼ぶ」

俺はきつぱりと告げる。サンがなおさらに怪訝な顔をする。

「どういう意味？精霊は魔法攻撃しかできないし、数で攻めようにも同時並行的に多数の精霊の力を使うのは、あんたでも厳しいのよ？」

「しってる。けど一人だけ、また都合よく脳内にひらめいた。唯一「物理的な決定力」を持つ精霊をね。あの窮地でサンをよんだ時みたい」

そう。あの感覚。二度目の頭を貫く閃光。そして浮かび上がったのは一連の文言。精霊との契約のためのプロポーズ。俺はサンの返事を待たずに腕を横に払い、紡ぐ。俺の指先から白い雪のような発光が飛び散っていく。

「我、汝の力を求めし者、汝、我が剣となれば、「最強」の名のもとに誓おう、その刃、砕けることなしと！」

その発光は地を伝い、広がっていく。俺とサンを取り囲むように広がったそれは、俺がしる「魔法陣」に似ていた。それに呼応するようにあたりに冷気がみちる。地面には霜が降り、湿気は凝縮されて水滴にかわる。それも地面に触れては凍りつき、一つの文様を形造った。それは氷の結晶。崩れることのない、完全な結晶であった。

「来たれ、シラユキ！」

最後、俺が紡ぎ終わると同時に結晶は砕け、白い空気があたりを覆う。そしてその中心、いまだにその冷気を吐き出し続けるそこに現れたのは一人の少女。長い黒髪を後ろで一本にまとめている白い肌が美しい女の子。同じく白い軍服を身にまとい、腰の長刀に手を当てて凜と佇む彼女の姿は美しいと同時に勇ましかった。その鋭い眼は俺をとらえて離さない。その寒気すら感じる存在感に俺は気圧されそうになりながらも、見つめ返す。彼女がゆっくりと口を開いた。

「問おう。貴殿が私を呼びし、主か<sup>あるじ</sup>」

「ああ、そうだよ……シラユキ、でいいかな？」

「違う、私はシラユキ。主の呼び声に答え参上した。その声、私を呼び覚ました男のものに相違ない。久々の力ある文言、感謝しよう」

「そんな、そんな。思いついたのを口に出したただけだって」

「もしそうだとするならば、主は相当な精霊たらした。あの契約の文言はいわば人間から精霊へのプロポーズ、それをポンポン口から出すなど……」

「マジでそういう意味だったの！」

心の中ではそう思っていたけど本当にそうなるとは……サンには悪いことしちゃったなあ……。すごいぶっきらぼうな召喚だった気がする……。どうやらサンもシラユキとの格差に気が付いたらしく、少し凹んでいた。

「ふふ、まあ気にすることはあるまい。私はすでに主の剣となることに承知した身、私の剣は主の意志と共にある」

「ありがとう、シラユキ。じゃあ早速で悪いんだけど……あれ、切ってくれないかな？」

俺は指だけの動きで「スッポソ」を指さす。彼女は指先の巨体を見止めると、軽くうなずいた。

「かまわん。任せてくれ」

言うが早く、彼女は俺たちの前に一歩進み出る。そして左手を虚空にかざす。

「集え、氷冷の剣！」

彼女の左手に握られていたのは抜き身の白刃、まごうことなき日本刀であった。刃渡りも大して長くない、典型的な形。しかしその白さは人の心を吸い寄せる魔性すら秘めているような気がする。

「ちょ、ちよつと！いくらなんでもそんな小さな刀じゃ……」

サンの言い分もよくわかる。ついに目の前程にまでやってきている「スッポソ」の巨体。見上げててもその巨大な甲羅すらうかがえない。大きくせり出した頭の下が見えるだけである。しかしシラユキ……氷の精霊はその表情を変えることなく、その白刃を振りぬいた

「斬！」

白刃の軌跡、それがそのままに「スッポソ」の巨体にトレースされた。足の付け根から、甲羅の上まですっぱりと断ち切られる。そして切断面はたちまち凍りつき、まるで斜面を滑るようになぜかいた甲羅はすさまじい音と爆風を伴って地面へ落ちていった。

「嘘……」

サンが大きく口を開けている。俺もきつとそうだろう。

「主よ、命は果たした。して、これはどうする」

俺たちはひとまずスッポソの討伐に成功し、大きく息を吐くのだった。

## どうやって保ちましょう

「本当に、ありがとうございました！」

「気にすることないって。君の仕事の助けができてよかったよ」

あのあと俺たちは尻尾の一部を手早く手に入れると3人は再びエリアに戻った。俺とサンは雷雲にのって向かったんだが、シラユキは「私は地に行く、なに、遅れることはない」といつて聞かず、彼女だけは平原を走って、この都市を目指したのだった。高いところが苦手なのかと俺は一人で納得していたのだが、しかしそれはそのためのいいわけなどではなくて、彼女は言うとおりに雷雲の移動速度についてきていたし、都市についてからも息をあらげるような様子は一切見せなかった。この異常なまでの体力、それは魔法の属性が持つ「特性」に關与するらしい。サンが教えてくれたところによると、「氷」は「斬撃」という特性を持っているそうだ。ほかのそれぞれの属性ごとに特性があつて、サンの「雷」は「貫通」の特性を持っている。そして最高位の存在である精霊たちはその「特性」の極致としての力を持つらしく、「斬撃」の特性の一つの完成形として「剣士精霊シラユキ」があるらしい。ゆえに体力などの能力値が異常に高いと……なるほど。あ、あの時間き損ねてしまったが、サンはどうなんだろうか。

「あ、お、お礼をしないとイケませんね……えっと、貧乏なんで本当にたいしたことでもできなくて……」

そして俺は彼女の工房にいた。二人は部屋の外で待つてくれている。俺たちが戻ってきたとき、このお世辞にも整っているとは言えない設備の中で、彼女は一人、すさまじい勢いで設計の改善、推敲に取り組んでいた。一心不乱、その言葉が似合うだろう。俺たちがかえ

つてきたことにも気が付かなかったし。この子はどこかぬけてるけど、一生懸命な女の子なんだ。

「いやいや、いいよ。気持ちだけで十分だよ。こうしてる間にも時間は流れちゃうから、作業に取り掛かるといい。俺たちは明日、君とあの男たちの引き渡しに立ち会ったらこの町を出ていくつもりだ」  
「えっ……もういっちゃうんですか……」

悲しそうに顔を落す彼女。その様子が少し気になった。

「ああ、俺は狩人じゃないしな。狩ったのは外にいるお姉さんたち。俺さ、いろいろと世界を見て回りたいんだよ」

「え……あ、あの狩人さんじゃないんですか……」

「ん？どうしたの、そんな悲しそうな顔して」

「お、お礼に……私が鍛えた剣……お渡ししようと思ってたんですけど……いりませんよね、こんなの。狩人さんじゃないんだったら……」

彼女の背中には一本の剣が隠れていた。大きさはシラユキの日本刀ぐらいであろうが、それとは違う。反りがなく、諸刃の西洋剣だった。白い漆のように光る鞘に入れられた、刃ぶりもそこまで大きくない物だ。柄には小さな赤い宝石があしらわれている。

彼女は申し訳なさそうにそれを急いでしまおうとする。別室に行つてしまいそうな彼女を俺は手をつかんで止めた。少しだけ彼女の背中がびくつと震えた。

「いや、いただくよ。いつまでも二人に頼っているわけにもいかなしい、いざという時、命を救ってくれそうな良い剣だ」

俺に剣の良し悪しなんてわからない。ましてや使ったことすらないけど彼女はそんな俺の言葉を受け取ると数回うなずいてうれしそうに言った。

「はい……私を救ってくれた、あなたみたいな素敵な剣になれば……うれしいです」

「おいおい、それは言いすぎだろ。俺は君の命を救ったわけじゃないぜ」

「でも、それくらい。う、うれしかったんですよ!？」

一步俺に一步詰め寄りながら言う。手まで取られちゃった……。作業中に着替えなかったのだろうか、いつもより強烈な女の子のにおいに俺の思考がマヒしてくる。心臓が変な音を上げ始めている。どくんどくん……しずまれ、俺。俺はこれ以上はまずいと思って無理やりに距離を置いた。

「そ、そうかよ。あとその言い方じゃ、俺まで素敵、みたいでおかしいぜ?じゃあ、俺はいくから。仕事、頑張れよ」

「そういう意味だったんですけど……。あ、はい。完璧な作品を仕上げて見せます」

彼女は力こぶを作ってそれをポンポンと叩いながらそう意気込んだ。俺は後ろ手に彼女に手を振って工房を後にする。扉を開ける。隙間から夕焼けの紅い日が差し込んでくる。最後に少しだけ振り向く。そこにはいまだにニコニコしながら俺を送ってくれる彼女の姿が。その頬が赤いのはきつと夕焼けのせいであろう。俺は扉を閉めて大きく息を吐く。これで仕事は一応の終了をみた。大きく息を吸い込んで……

「あぶなかったああああああ!」

理性が。

部屋の外で待っていた二人の精霊が俺のことを怪訝な目で見ていたことは言うまでもないだろう。

どうやって保ちましょう（後書き）

ふう……ひと段落です。なんだかいろいろとぶれてしまった気がしますね……次回からがんばります。どうぞよろしくお願いします。

改善点ご指摘在りましたらお願いします。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1511ba/>

---

ノリで神様いじったら異世界で波乱万丈ライフ

2012年1月12日22時45分発行